

ゴミで埋まった部屋で
ひっそりと……

部屋に残された異臭と痕跡

8月9日、名古屋市千種区内のアパートの一室で無職男性(65)が遺体で見つかった。部屋にはゴミが数十センチ積み上げられ、遺体はその中であぐらをかいた状態だった。

「男性は昨年11月、当時の職場に『体調が悪いので休

む』と連絡して以降、欠勤。男性と連絡が取れなくなり、アパートの管理会社が部屋の片づけを清掃会社に依頼しました。作業員が遺体を見つけたんですが、死後半年以上経過し、一部が白骨化していて、ゴミの中で頭が何とか見える程度

現代社会を象徴するキーワードの一つが「孤立」。人知れず息絶えていった人々を「遺品整理」という行為を通して見てきた人物がいる。そこには人間関係の希薄化とともに、「孤立死」が高齢者から若者へとシフトしつつある実態があった。

「孤立死」が高齢者から若者へとシフトしつつある実態があった。

誰にも看取られることなく息を引き取り、その後、相当期間放置される



「遺品には故人の生き様が詰まっている」と語る
吉田太一氏

見た

の

部屋の電話機には「助けを求める血の手形」がクッキリと……

死因不明の急性死や事故死などの検案、解剖を行う東京都監察医務院が公表しているデータによれば、東京23区内における65歳以上の単身者による自宅での死亡者数は13年で2733人。この10年間で、数字は増え続けている。孤独死の発生率が上がるのは、男性が50代前半以降、女性は60代後半以降。発見される平均日数も、女性の6日に比べ、男性は12日と、2倍の差があるのだ。

孤独で突発的な死に対応し、故人の遺品整理や回収だけではなく、部屋の掃除と原状回復から遺品の供養まで幅広いニーズに応えている会社がある。02年の創業以来、13年の実績を持つ遺品整理のバイオニア「キーパーズ」であり、これまでに2万件以上の依頼を受けてきた。「孤立死」(扶桑社)などの著書がある同社の吉田太一代表が、遺品整理の立場から見た孤立死の実態を語り尽くした。

「私たちが遺品整理の仕事を行う場合、遺体はすでに運び出され、その場にはありません。でも、そこには鼻をつく異臭とともに、死に至るまでの痕跡がくっきりと残されている。そして故人が残していた遺品は、1人の人間が生きていた証し。言いかえれば、人

問題抽出レポート



作業する「キーパーズ」のスタッフ

生そのものを物語っているのです」

例えば、50代男性が孤独死したアパート。遺体発見のきっかけは、3カ月の家賃滞納だった。警察官立ち会いのもと、大家がドアを開ければ、部屋の中はさまざまに腐臭が部屋中に充満している。ゴミの山をかき分けながら部屋に入ると、男性は布団の中で息絶えていた。死後3カ月だった。「警察からの知らせでお兄さんが上京したんですが、弟さんが暮らしていたアパ

遺品整理業者が孤立死現場

悲哀

1トに1回も立ち寄ることなく「請求書を送ってください。あとはお任せします」と連絡があつて故郷に帰ってしまった。そんなケースもありました。また、75歳の独居老人が

亡くなったのは、公団住宅2階の角部屋だった。遺体が放置されていた部屋へ続く階段を上がると、排水溝に丸々と太った蛆虫がはいずり回っていた。吉田氏が扉を開けると、無数の蛆虫が床を埋め尽くし、布団をめくると、そこは蛆虫の孵化場さながらの光景が広がっていたのだ。こたつの上には干からびた食べかけの総



菜と、乾ききった茶碗が1個置かれていた。吉田氏が続けて回想する。「男性の遺体は亡くなってから1カ月が経過してしました。ところが、清掃作業のあと、息子さんが階段を下りてくる。聞けば同じ公営団地の1つ上の階に住んでいるというんですね。そ

量の上に人の形が残っている現場にも遭遇